

妖怪「だ」の研究

—何もないのか、ゼロがあるのか—

The Study of Japanese Copula 'da'—an Extremely Unstable Form¹

池田 菜採子

Natsuko IKEDA

第1章 はじめに

現代の日本語教育では、日本語の述語は動詞、形容詞、「名詞+だ」の3本立てであると教えるのが一般的である。それぞれ動詞文、形容詞文、名詞文と呼ばれている。しかし、はじめから3本立てであったわけではない。動詞と形容詞が、以前から述語として安定的地位を保っていたことに比べると、「名詞+だ」はなかなか述語としての地位を確立することができなかった。その原因は「だ」にある。

文法研究の歴史において、「だ」ほど名立たる文法家たちを翻弄してきたものがほかにあるだろうか。動詞の活用の説明が文法諸家によってそれほど大きな差がないことなどに比べると、「だ」の解釈は実に様々である。その理由の一つに「だ」の語法上の面白さがある。「だ」は、あるときには現れ、あるときには見えなくなる。「アノ人ハ病氣サ」と言ったときに、「だ」は「病氣」の後ろにあるのだろうか、ないのだろうか。省略されているのだろうか、もともとそこには存在しないのだろうか、あるいはゼロという形で存在

しているのだろうか。多くの文法家が「病氣」の前に「だ」は存在しないと考えた。そこで、今度は、終助詞も名詞を述語にする力があると言う人があれば、いや、そうではない、名詞そのものに叙述性があるのだと言う人もあった。

また、「だ」は全く別の顔を持っている。今となっては「で」が「だ」の活用形であることは当然であるような気がする。しかし、文法家の多くはなかなかそのことに気がつかなかったのである。さらにやっかいなことに、「だ」は、あるときには「な」になり、あるときには「の」にもなる。「に」や「と」も「だ」の活用形であるかのような顔をするのがあって、そのことがまた文法家を困惑させる。「だ」を断定の助動詞、「だろう」は推量の助動詞というように別のものとする人もいれば、「だから」や「でも」は接続詞として「だ」と切り離して考えようとする人もいる。しかし、結局それらは全て一つの「だ」でしかないのだ。そのような「だ」の面白さを、筆者はアメリカの言語学者 Bernard Bloch に教えてもらった。

「見えんけど、おる」は漫画家の故水木しげる氏の信念として有名な言葉だが、文法の

¹ 妖怪の英語訳にふさわしい言葉が見つからなかった。英語タイトルは Jordan (1987a:227) を参照した。

中の「だ」はまさに見えないけど、いるからややこしくなるのである。文法諸家を悩ませ続けてきた「だ」を、本研究では愛着を込めて妖怪「だ」と呼ぼう。妖怪「だ」がこれまでの文法研究の歴史においてどのように扱われてきたかを詳しく考察し、どういう経緯で「名詞+だ」が述語として認められ、3本立ての述語が日本語教育に定着したのか、その変遷を見ていくことが本研究の目的である。これから Bloch (1946b) 以前あるいは Bloch (1946b) と同時代の文法家が説明する「だ」を検討していくが、その際の手懸りは次の8点である。

- ①「だ」の品詞は何か。「である」をどのように分析しているか。
- ②「だ」の活用パラダイムに「で」、「の」、「に」、「と」を入れているかどうか。
- ③「友達ノ池田サン」の「の」を「だ」の活用形と認めているかどうか。
- ④「アノ人ハ病気サ」の「さ」の前に「だ」があると見ているか、ないと見ているか。助詞の前で、「だ」が脱落する現象について、どう捉えているか。
- ⑤「名詞+だ」を述語として見ているかどうか。
- ⑥「雨が降った。雨が降ったから、人がこなかった。」を「雨が降った。だから、人がこなかった。」のように言えるということから、「だ」には「前文代理的な役割²」（佐久間1956:190）があると佐久間は述べたが、これについてほかの文法家は言及しているかどうか。
- ⑦奥津(1978)のうなぎ文で知られる「述語代用説³」について言及しているかどうか。

² この語は佐久間(1956)の用語であるが、このまま使わせていただき、「前文代理的な役割」と「」に入れて表記する。

³ この語は奥津(1978)の用語であるが、このまま使わせていただき、「述語代用説」と「」に入れて表記する。

うか。

⑧「だ」の前に来るのは名詞だけなのか。

第2章 文法諸家の「だ」の記述

第1節 19世紀の日本語教科書の記述

19世紀後半に書かれた日本語教科書は、その多くが動詞、形容詞の2本立て述語である。「だ」そのものの説明はなく、「である」の説明の中で、その縮まった形として「だ」を取り上げているものが多い。Aston (1871) は、助詞「で」の説明の一つとして次のように述べている。

(2-1)

When two nouns are joined together by the verb to be (Aru, Arimasū, gozaimasū) the latter affixes de.

Examples

Watakūshi wa kajiya de gozarimusū.

I am the Blacksmith.

Kono mushi wa tombo de aru.

This insect is a dragon fly.

Aston (1871:11)

(拙訳) 二つの名詞がbe動詞(ある, あります, ございます)で結ばれるとき、後ろの名詞に「で」が付きます。

例)

わたくしは、鍛冶屋でござりむす。

この虫はトンボである。

(2-2)

De aru is in the vulgar Yedo dialect contracted into da, and de wa, into ja.

Aston (1871:11)

(拙訳) 江戸の下品な方言の「である」が、縮まって「だ」になった。「では」は「じゃ」になる。

このようにAston (1871) は、「で」を助詞、「ある」をbe動詞として説明した。

Imbrie (1889) は、名詞や代名詞そのものが述語であり、その後ろにbe動詞の「である」やその縮まった形「だ」がつくのだと説明した。Imbrie (1889) にとって「だ」「である」は共にbe動詞である。

(2-3)

Followed by a noun or pronoun as a predicate, to 'be' is rendered by de aru, often contracted da.

Imbrie (1889:35)

(拙訳) 述語としての名詞や代名詞の後に、「である」やその縮約形「だ」という形でbe動詞が来る。

Chamberlain (1889) も述語は、動詞と形容詞のみである。

(2-4)

The predicative verb or adjective of each clause is placed at the end of that clause, the predicative verb or adjective of the main clause rounding off the entire sentence.

(拙訳) 節の述語となる動詞と形容詞は節の最後に置かれ、最終節の述語となる動詞や形容詞が全体の文を包括する。

Chamberlain (1889:254)

Chamberlain (1889) は、「ある」「あった」「あろう」に助詞「で」がついた形についてこう述べた。

(2-5)

De gozaimasu, de gozaimashita, de gozaimasyo, etc. (truly polite), are the simple verb "to be" without "there",—that is to say

they mean "I am," "he, she, or it is," "we are," "you are," "they are," and so on through all the other tenses. Da is a corruption of de aru; datta and daro are corruptions of de atta and de aro, with which they exactly agree in meaning.

(拙訳) 「でございます」「ございました」「ございましょう」(丁寧な形) はbe動詞であり、存在の意味はない。つまり"I am," "he, she, or it is," "we are," "you are," "they are," ということである。「だ」は「である」の縮まった形で、「だった」「だろう」はそれぞれ「であった」「であろう」の縮まった形で、意味の上では全く同じである。

Chamberlain (1889:216)

この引用部から、Chamberlain (1889) は「だった」「だろう」を「だ」の活用形と考えていたと受け取ることもできるが、はっきりとした言及はない。いずれにせよChamberlain (1889) も「である」をbe動詞として動詞の範疇で扱ったことだけは確かである。

だが、Chamberlain (1889) は卓見である。助詞「で」の用法の一つに、be動詞に相当するものがあることに気がついた。

(2-6)

De has its second signification, i.e., it properly means "being", in such cases as the following:—

Ima no kuruma-ya wa, dajaku de, yaku ni tatanai.

Yoppodo beppin de aru.

San-ji han de gozaimasu.

(拙訳) 「で」にはもう一つの意味がある。以下の例では、「being」と同じ意味になる。

今の車屋は懦弱で、役に立たない。

よっぽどベッピンである。
三時半でございます。

Chamberlain(1889:61)

以上のように、19世紀後半の日本語教科書は、「である」やその縮まった形「だ」をbe動詞として、動詞の一つとして扱ってきた。よって述語とは、動詞と形容詞の2本立てだという考えが一般的であった。

ここまで見てきたのは、19世紀後半の教科書だが、こうした流れは、20世紀前半になっても基本的に変わらない。Hendersonは大変な日本通として知られる人物であり、Chamberlainや山田孝雄の研究に精通していたことは、池田（2013）で述べたとおりである。そのHenderson（1943:76）さえも「である」の「で」について、次のように述べ、その扱いに苦慮しているのがわかる。

(2-7)

It is only a matter of nomenclature whether the *de* before *aru* and *gozaru* is regarded as a postposition or as a verb. It seems simplest to regard this *de* as essentially a verb, with a meaning similar to that of the English participial "being".

Henderson（1943:76）

（拙訳）「ある」や「ござる」の前の「で」を助詞とみなすか、動詞とみなすかという名称の問題がある。この「で」を英語の分詞形"being"に似た意味を持つ動詞と基本的にはみなしておくことが最も簡単であろう。

第2節 山田孝雄

「である」そのものがbe動詞、あるいは「で」が助詞で「ある」がbe動詞という考え方の流れが変わったのは、山田（1922）からである。山田（1922）は、用言を実質用言と

形式用言に分け、動詞、形容詞を実質用言、「ある」「だ」「です」を形式用言とした。

(2-8)

この古來所屬の不定な「あり」といふ用言を見ると、これは形容詞にも動詞にも屬すべきものでなくて、二者に共通して兼ねる点もあり、さうして、その實質が極めて廣く漠然としてただ存在を示すだけのものであるが、その用方によつてはただ斷言の用をするに過ぎないものもある。この「ある」といふ語を一の品類として他の用言と區別することとすれば、古來の疑點を片附けることが出来る。そこで、用言を実質用言と形式用言との二にわけることが意味のあることとなるのである。

實質用言といふのは陳述の力と共に何等かの屬性觀念をもあらはしてゐる用言であつて、所謂「ある」を除いた動詞形容詞のすべてが之にあたる。形式用言といふのは陳述の力を有することは勿論だが實質の甚しく缺乏してただ存在をいふに止まり進んでは單に陳述の力を有するだけに止まるものである。

形式用言とこゝにいふのは「ある」の外に「だ」「です」などいふものもある。これらはいづれも陳述の力を有するだけである。これを一の品詞として取扱ふ場合に存在詞と名づける。この外に文語には「如し」「なり」「たり」等形式用言といふべきがあるけれど、口語では「ある」「だ」「です」を形式用言とする。

山田⁴（1922:62）

このように山田（1922）は「ある」に着目し、「ある」を存在詞として立てたが、このうち陳述の力だけを持つ「ある」を特に説明

⁴原文どおり引用したが、2点しんによっただけは入力できなかったため、1点しんによつてなっている。以下、山田（1922）からの引用は全て1点しんによつてなっている。

存在詞とした。

(2-9)

陳述の方だけの「ある」は説明存在詞と名づける。これは「で」の下に用ゐられるものであるが、その「で」と「ある」との合體して出來た「だ」といふ語があり、又「である」の代りに用ゐられる「です」といふ語がある。此「だ」「です」も説明存在詞である。

「で」の下に「ある」を加へたものが、陳述をなすものであることは前にいつた所であるが、これを存在の「ある」と區別して説明存在詞といふ事にする。さうするとこの類が外にも多少はある。

「だ」といふ語は上の「である」の合體して約まり下が略されたもので、關西地方では「ぢや」といふのである。この「だ」は今は終止形だけであるが、その用は終止としても用ゐられ、また連體としても用ゐられる。

その例。

ことしは豊年だ。

楠木正成は忠臣だ。

本当に寒さうだ。

これらは終止に用ゐた例で、

あの人が嫌いだものですから。

ほんとうにうまそうだこと。

これらは連體に用ゐた例である。

山田 (1922:87-88)

このように山田 (1922) は、「だ」を説明存在詞とした。しかし、「だ」の活用は「だ」だけであると考えた。「なり」は別の説明存在詞として扱われた。

(2-10)

文語には「なり」といふ説明存在詞があるが、これが口語でも用ゐられるが活用形と用法とが、多少かはつて次のやうになつてゐる。

(體言をうけるもの)

未然形	連用形	終止形	條件形
なら	なり		なれ

(副詞をうけるもの)

未然形	連用形	終止形	條件形
なら		な	なれ

文語の「なり」は助詞「に」と「あり」との結合したものだが、それは體言をうける場合と副詞を受ける場合とある。それが口語には伝わつてはゐるが、體言を受ける場合と副詞を受ける場合とによつて活用形の上にも用法の上にも多少の違いが出來てゐる。

山田 (1922:90)

山田 (1922) は存在詞の敬語として「ござる」を挙げた。だが、「これは一豊の馬でございます。」(山田 1922:94) の場合の存在詞は「ござる」であるとし、「で」は助詞とした。

このように、山田 (1922) は「だ」「です」を説明存在詞として一つの品詞を立てたのだが、「ある」や「ござる」も説明存在詞とし、その前につく「で」は助詞とした。

山田 (1922) は、「述語」の一部に「資格」を置く。「資格」とは次のような語を指す。

(2-11)

ある語が主格に對して陳述をするに用ゐられるを述格といひ、述格に立つてゐる語を述語といふ。述語はまた説明語といふことがある。

述格はpredicateの譯語で又資格とも譯する。しかし本書はこの二語を區別して、その陳述をする語の位置を述格といひ、用言の觀念部を補充するものを資格とする。即ち述格の一部分に資格といふものを置くのである。〔中略〕

資位觀念の缺けた用言「する」「ある」「だ」

「な」等に接してその賓位観念として補充せられるものを資格といふ。〔中略〕

その例。

兄さんといつしょに勉強する。

月は永久に人間の良友である。

これも一興だ。

それは容易でない。

あすはもう5月の節句です。

みごとな瀧だ。

山田⁵ (1922:242-245)

そして次のように資格に説明存在詞がついた形を述格とした。

(2-12)

「ある」「ない」「ございます」等に對する資格は體言、準體言⁶、情態副詞⁷で、いずれも格助詞「で」を伴つて接するのである。

〔中略〕

體言が資格である例。

大方鷗であらう。

これは銀行家である。

此の身は鐵石ではない。

それは私の着物でございます。

〔中略〕

「だ」「です」の資格は「ある」の資格に同じであるが、助詞を伴はずに直に接するものである。〔中略〕

體言が資格である例。

あれが北斗七星だ。

今度の競争こそ見ものだぞ。

蝶はいつ見てもかはいらしいものです。

〔中略〕

すべて資格の語とそれについて形式用言と

⁵ 下線は山田の原文どおり。

⁶ 山田 (1922:249) は存在詞の前に来る準體言として「獸なのである」「逃がしたのでは」のような「の」を挙げた。

⁷ 山田 (1922:249) は存在詞の前に来る情態副詞として「静かである」「質素である」などを挙げた。

は相合して一の用言と見做して取扱はねばならぬものである。

山田⁸ (1922:249-251)

ここで、山田 (1922) が「ある」「ない」「ございます」の前の「で」を格助詞と述べているところがおもしろいところである。山田ほどの文法家がなぜ「で」を「だ」の活用形と考えなかったのか。

さて、山田は「資格+存在詞」、例えば「北斗七星だ」というような形を一つの述語としたのだが、「だ」や「である」がなくてもまた述語であると述べた。

(2-13)

「ある」「だ」に對する資格である體言は、その文勢の急迫な場合に述格である所の用言を全く缺いて直に終助詞間投助詞を下にふんで述格に立つことがある。

その例。

今来たのは誰か。

あれも支那からくるのか。

字をかくのよ。

しれた事よ。

そういつたのはわたしさ。

それはその筈さ。

山田⁹ (1922:251-252)

このように山田は説明存在詞を欠くもの、つまり名詞に助詞が直接ついた形もまた述格であるとした。これらの表現が「だ」を省略したものとは考えず、用言を全く欠いたものとする。山田のこの記述は、體言そのものが述語になる力を持つと考えたということなのか、終助詞、間投助詞に體言を述語にする力があると考えたのかは不確かである。

⁸ 下線は山田の原文どおり。

⁹ 下線は山田の原文どおり。

以上のことから、本研究の八つの手懸りに従って、山田（1922）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は説明存在詞。「である」の「で」は格助詞、「ある」は説明存在詞。
- ②「だ」の活用は、「だ」のみである。
- ③「友達ノ池田サン」のような例は挙げていない。
- ④「アノ人ハ病氣サ」のような文では、「病氣+サ」は用言を全く欠いた述格だと言う。つまり「さ」の前に「だ」は存在しないと考えている。「体言+終助詞、間投助詞」も述語になることができると見ている。
- ⑤資格+説明存在詞を述格とした。
- ⑥「前文代理的な役割」には言及していない。
- ⑦「述語代用説」には言及していない¹⁰。
- ⑧説明存在詞の前に来るのは名詞、「の」、形容動詞語幹¹¹である。

第3節 松下大三郎

松下（1930¹²）は、名詞そのものに叙述性があるのだと考えた。

(2-14)

敘述態は名詞が動詞の様にその觀念に明確な判断が加はつて叙述性を帯びたものである。

苦は樂の種。 酒は百薬の長。
親の物は子の物。 ならぬ堪忍するが堪忍。
の「 」の類である。「種だ」「長だ」……といふ様な意である。但し「種だ」……と云へば名詞でなくて名詞性動詞である。「だ」なしに「だ」の様な意味を帯びる用法が名詞の敘述態である。

松下¹³（1930:427）

松下は、「だ」なしに「だ」の意味を帯びる用法を名詞そのものが持っているのだと考えた。「酒は百薬の長。」という表現は、「だ」が省略されたものではなく、「だ」は最初からそこには存在しないと考えた。逆に「だ」がある場合をわざわざ「名詞性動詞」と呼び、動詞の一つと考えている。

松下（1930:195）は、「に」「と」を断定の動助辞とした。この「に」は「静かにする」の「に」で、「と」は「大臣となる」の「と」だと言う。そして、「に」の「轉活用¹⁴」として「な」「だ」「です」を挙げ、これらもそれぞれ別々の断定の動助辞だと考えた。はじめに「に」があって、その活用した形に「だ」があるということはユニークな発想である。「に」に静助辞「て」がついた形「にて」の約音が「で」であるとしたが、この「で」もまた別の断定の動助辞とした。松下は「で」を助詞から断定の動助辞に格上げした最初の

¹⁰ 少なくとも山田（1922）では「述語代用説」について明確な言及はない。しかし奥津（1978:212）は、山田（1936:270）が存在詞の定義として、「ほとんどいっさいの用言の基本的な部分を代表す」と述べたことを挙げ、山田が「述語代用説」派であると述べている。

¹¹ 形容動詞を立てる文法家もいれば立てない文法家もいる。日本語教育ではこれをナ形容詞と呼ぶ。本研究では「静か」や「きれい」という部分を特に指して言いたいときは、便宜上形容動詞語幹と呼んでおくことにする。

¹² 筆者が参照したのは松下（1961）であるため参考文献ではそう記したが、これは1930年出版のものの復刻版であるため、本文では松下（1930）として書いていく。

¹³ 下線は松下（1930）の原文どおり。

¹⁴ 「に」の「轉活用」は、松下（1930:195）によれば以下のとおり。

		第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
特別ラ行變格	〔静か〕	なら	なり	なり	な	なれ
同	〔静か〕	だら	だり	だり	だ	だれ
特別サ行變格	〔静か〕	でせ	でし	です	です	ですれ

人物である。ただ松下は「で」を「だ」の活用形とは見ていない。「だ」も「で」もそれぞれ別々の断定の動助辞だと言う。

松下は、それまでの文法家が助詞として扱ってきた「で」を、断定の動助辞とした。そこまではよかった。ところが松下は、今度は何でもかんでも断定の動助辞「で」にしようとした。「今日は祭日で明日は日曜だ。」（松下1930:207）は当然断定の動助辞だが、「小刀で鉛筆を削る」「東京で学問をする」（松下1930:208-209）など、明らかに助詞だと考えられるような「で」も、断定の動助辞として全て説明できるとした。これは少し残念なことである。しかし、ここがまた妖怪「だ」らしいところである。「だ」と助詞の境界線が実に曖昧なのである。

ところで、松下（1930）の説明は、松下（1906）とはやや異なる点もある。例えば松下（1906:542）は、「です」を断定の動助辞ではなく、助詞としているし、「父ハ商人デ、兄ハ軍人デス」の「で」を助詞であると述べている（松下1906:583）。また、松下（1930）では「の」を断定の動助辞とはしていないが、松下（1906）では名詞修飾の例文で、さりげなく「私ト同ジ下宿ノ客」を出している（松下1906:564）。松下（1906）と松下（1930）の説明の違いは、考えがその後変わったということかもしれないし、松下（1906）が日本語学習者に向けて易しく書かれたためであるかもしれない。

以上から、手懸りに従って、松下(1930)の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は断定の動助辞。「である」の「で」は断定の動助辞、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は、「だら」「だり」「だ」「だれ」（松下1930:195）。「だ」は「に」の轉活用である。「な」や「で」は、「だ」の活用形ではなく、それぞれ別の動助辞

として扱われる。

- ③「友達ノ池田サン」の「の」を「だ」の活用形とは述べていない。だが松下（1906）で「私ト同ジ下宿ノ客」という例を出している。
- ④「アノ人ハ病氣サ」のような文では、「病氣」という名詞自体の叙述的用法だとした。
- ⑤松下（1906）では「□ハ」を主語、「□デス」を説明語と述べている。
- ⑥「前文代理的な役割」には言及していない。
- ⑦「述語代用説」には言及していない。
- ⑧松下（1930）では、「だ」「です」の前は名詞か形容詞語幹の例文しか見当たらない。

第4節 橋本進吉

橋本（1948a:22）は、述語には、動詞的なもの（「どうする」）、形容詞的のもの（「どんなだ」）、及び体言¹⁵に「だ」のついたもの（「何だ」）の3種があると述べている。ただし、純粹に3本立てというわけではなく、「用言¹⁶が述語になる場合が最も普通である」（橋本1948a:219）としている。体言が述語になる場合は、その後ろに指定の助動詞「だ」「です」がつくのだが、第3種の助詞がついても述語であると述べている。

(2-15)

體言も述語となることがあります。その場合には體言に指定の助動詞「だ」「です」や、第三種の助詞の附くのが通例です。

これは地理書だ（です）。

会場は此處か。

あれはにせものさ。

¹⁵ 橋本の体言は名詞、代名詞、数詞。

¹⁶ 橋本の用言は動詞、形容詞、形容動詞。

[注意] 體言に助詞が附いて述語になった例として挙げた類のものを、次のやうに體言の下に指定の助動詞が略されたものとして、一々それを補つて文法的説明を興へる人があります。

会場は此處(です)か。

あれはにせもの(だ)さ。

しかし本書では、體言に助詞の附いたのを、ありのまゝの形で直ちに述語と見ます。

橋本¹⁷ (1948a:219)

このやうに橋本もまた、さきの山田、松下と同様「體言+助詞」もすなわち述語であり、ここに「だ」は省略されているわけではないという考えを述べた。

橋本(1948a)は「だ」「です」を指定の助動詞としたが、一方「だろう」「そうだ」「ようだ」などもそれぞれ別の助動詞として認めた。よって橋本の「ダ」は三種類、四種類にもなる」と述べたのは奥津(1964a:76)だが、その指摘のとおりである。

また、體言を述語にする力を持つものとして、「だ」、「です」、助詞のほか「らしい」を挙げた。

(2-16)

體言その他に附くものは、指定(だ、です)の助動詞及び推量の「らしい」で、助動詞自身に叙述する意味を持つて居り、體言のやうな、自身で叙述する力の無いものに附いて、これに叙述する意味を附與し、之と共に一の用言のやうなものとなり、之に述語となり得る力を興へるものであります(「地図だ」「學校です」「あれは父親らしい」などは右の通

りです。)

橋本(1948a:39)

「である」については次のやうに述べ、「で」は、やはり助詞であるとの見方を示した。

(2-17)

「だ」と「である」とは共に指定に用ひられますが、文法上からは、「だ」は一語の助動詞で、「である」は助詞「で」と動詞「ある」とに分けて見るべきものです。實際の用法から見ましても、共に指定に用ひられるとはいひながら、

孝子ではあるが……。

勉強家でさへあれば……。

某は美術家でもあれば文學者でもある。

のやうないひ方は、「だ」にはありません。かやうに「で」と「ある」との間に、他の語の入る事があるのは、この二語が一語と見なすべき程に、緊密に結びついて居ないからであります。

橋本¹⁸ (1948a:144-145)

橋本(1948a)の指定の助動詞「だ」「です」の活用体系は次のとおりである。

(2-18)

未然形	だら	でせ
連用形	だつ	でし
終止形	だ	です
連體形	(な)	—
假定形	なら	—
命令形	—	—

橋本(1948a:巻末第4表)

橋本の「だ」の活用パラダイムに「で」は入っていない。しかし、「だ」系列のもの以外に「な」系列のものも入れた。これは山田

¹⁷ 引用は原文どおりだが、一部2点しんによるの入力ができず、1点しんによる表記になっている。下線は橋本(1948a)。

¹⁸ 下線、°の記号は橋本(1948a)。

(1922), 松下 (1930) には見られなかったものである。

(2-19)

「だ」の活用は頗る不規則であります。その用法も限られてゐます。その五活用形（命令形を缺く故、活用形は五となる）に配したものは、その起原からいへば、二つの系統に分れます。即ち未然形から終止形まで（「だ」のあるもの）は「である」から出たものであり、連體形・假定形（「な」のあるもの）は「にある」から出たものであります。それ故、之を二つの語として取扱ふものもありますが、それ等は現在の用法から見れば互いに他に無い活用形を補つて、一語のあらゆる活用形の用をなしてゐるのですから、本書では一語の語形變化と認めたのであります。

橋本¹⁹ (1948a:139)

橋本 (1948a) は形容動詞を品詞として別に立てるので、一応その活用表を確認しておきたい。この活用表は形容動詞の一部であり独立した品詞ではないが、ここには「で」や「に」が入っている。

未然形	だろ
連用形	だっ、で、に
終止形	だ
連體形	な
假定形	なら
命令形	○

橋本 (1948a:巻末第3表)

以上は橋本 (1948a) の記述である。しか

¹⁹ 原文どおり引用したが、「即ち」の「即」のみ新字体しか入力できなかった。

²⁰ 橋本 (1948b) は橋本進吉博士著作集第二冊であり、引用部は、橋本 (1936) 「助動詞の分類について」『國語と國文學』第13巻第10号からとった。

し、橋本 (1948b²⁰:161) では「学生だ」「学生なので」「学生になる」「あれは学生で」「学生ではない」などの例を挙げて、この場合の「に」や「で」は、「だ」の代用をなしているものという解釈を述べている。

(2-21)

「だ」の場合に「學生に」「學生で」を「だ」の活用のやうに取扱つたが、これは普通助詞と見られてゐるのであつて（「で」だけは「だ」の活用と見るものもある）、かやうな取扱は不當なやうであるが、右のやうな場合には、「に」「で」は活用形と同様なはたらきをなしてゐるもので、少くともその代用をなしてゐるものと見て不当ではあるまいとおもふ。

橋本 (1948b:161)

以上から、手懸りに従つて、橋本 (1948a) の研究をまとめておきたい。

- ① 「だ」は指定の助動詞。「である」の「で」は助詞、「ある」は動詞。
- ② 「だ」の活用は、「だら」「だっ」「だ」「な」「なら」。な系列のものも「だ」の活用とした。「で」はここには入らない。ただし橋本 (1948b) では、「で」と「に」について、「だ」の活用形ではないが、その代用をなすこともあるとした。また、「だろう」や「ようだ」はそれぞれ別の助動詞である。
- ③ 「の」は「だ」の活用形ではない。
- ④ 「だ」「です」以外に、第3種の助詞や「らしい」も体言を述語にする力があるとしている。
- ⑤ 「体言+だ、です、助詞、らしい」などを述語とした。だが、用言（動詞、形容詞、形容動詞）が述語になるのが最も普通だとも述べている。

- ⑥「前文代理的な役割」には言及していない。
- ⑦「述語代用説」には言及していない。
- ⑧「だ」「です」の前が名詞、または形容動詞語幹の例文しか見当たらない。

第5節 佐久間鼎

佐久間(1943)は、「である」の「で」に着目し、これを助詞とする分析に異を唱え、次のように述べた。

(2-22)

“で”といふ助詞と“ある”といふ動詞とに分解して、その結びつきとして説くことは、この邊の事理を明かにする所以ではない。存在をあらはす“ある”は、還元された“である”の形において、語源的になごりを留めてゐるにしても、それはすでに存在をあらはすといふ本来の機能を失つてゐるし、その際の“で”を助詞の一種として説くが、格助詞“で”とその用法において、まったく異なつてゐることは、特に注意すべきものがある。すでに“で”に十分にコプラ的意義が含まれてゐることは、これが中止法として用ゐられることや、他の語と結んで接續詞を造り出すことなどに徴して察しられる。

そこで、日本語にあつては、存在の意味をあらはす動詞は、單獨にかつ十分にその機能を發揮して、存在文の述語となるのに對し、論理學にいふ説明判断に相當する文にあつては他の語詞中にも典型的に“だ”が普通に解されるコプラの役目を荷つて登場するといふことになる。この種の語詞が、形態の上でもおのづから他の動詞と異なり、しかも用法の上で他の助動詞とも同様にすることが適切でないところから、筆者は特にこれに措定詞といふ名稱を興へて特立させてみようと思へる。

佐久間²¹(1943:141-142)

このように佐久間(1943)は、「で」にコプラ的意義を見出した。そして「で」を「だ」の活用とし、「だ」を措定詞とした。「だ」の活用を佐久間(1943)は次のようだとした。佐久間(1943)は形容動詞を立てるので、形容動詞の活用と併せて紹介しておきたい。

性状詞Ⅱ (形容動詞)	ナダ活	-na(連體) -da(終止)	-ni	-nara	-de	-daro	-dat-
措定詞		da	×	nara	de	daro	dat-

佐久間(1943:141)

佐久間(1943)によって、「で」は初めて「だ」の活用形の一つとして認められた。さきの松下(1930)は「で」を断定の動助辞としたが、松下は「で」を「にて」の縮まった形と見ていて、「だ」の活用形とは考えなかった。

佐久間(1943)は、措定詞を述語の一つとした。

(2-24)

日本語では、状態概念や、性質概念を賓辭とする“品さだめの判断”は、存在を示す動詞“ある”や形容詞・形容動詞を述語とする構文によつて表現されるのに對し、対象概念を賓辭とする“説明的判断”は前述の措定詞を述語として表現される次第で、この構文の上の殊別は、判断のそれぞれの論理的特性を區別して考へるためにはむしろ有利な立場を興へるものといふべきだ。

佐久間(1943:142-143)

²¹ 原文どおり引用したが、「説く」の「説」など一部旧字体が入力できないものについては、新字体に改めている。

²² 筆者が参照した佐久間の『現代日本語法の研究』は1956年出版のものだが、この初版は1940年に出版されている。

佐久間（1956²²）は、「だ」の持つ機能について大きな発見をした。「だ」「です」が接続詞を作る機能に着目し、「だ」「です」は「前文代理的な役割」（佐久間1956:190）を有すると考え、その意味でほかの語詞とは違うと述べた。

(2-25)

単に「が」を用いるかわりに「だが」「ですが」というような類もあります。「けれども」「だけれど」「ですけれども」なども同様です。しかし、一方には、断定の語詞をつけないと成り立たないものもあります。「だから」「ですから」「だのに」「だったら」「でしたら」というような接続詞がそれです。この場合に「だ」や「です」は、前の一文の内容を反復するかわりに代理しているといったカタチで、そういう役割については、ソ系統の指示語とおのずから相通じるものを示します。すなわち

雨が降った。だから、人がこなかった。
という場合は、内容上

雨が降ったから、人がこなかった。
というのと異なるところがないのでして、つまり

雨が降った。雨が降ったから、人がこなかった。
というところを、反復をさせて接続詞を使ったのだと見るのが出来ましょう。

佐久間（1956:24-25）

このように佐久間は、「で」を「だ」の活用形と認め、「前文代理的な役割」にも気がついた。「だ」の研究は一気に進展した。

しかし、その佐久間でさえも、「アノ人ハ病気サ」のような「だ」が現れない文については、やはり既出の文法家同様、「だ」に惑わされるのである。「アノ人ハ病気サ」の名

詞「病気」を述語にする役割を担っているのは、「さ」だと考えたのである。つまり「さ」の前に「だ」はもともとなくて、その代りに「さ」が「だ」を代行しているのだと述べた。

(2-26)

“終助詞”の一つとして取扱はれてゐる“さ”の如きも、實は“だ”の職能を代行するところの（活用のない）措定詞と認めるべきものだし、また措定詞を缺いてその代りに“よ”“ね”のやうな助詞を添へていふ場合も、口頭語の實際ではすくなくない。

事件の叙述をその主要な職責とする一般の動詞と大いに趣を異にする所以を、そこにも見出すことができよう。

佐久間（1943:143-144）

終止助詞「さ」については、佐久間（1956:69）でも、「だ」など、断定の語をつけずにすぐ名詞に接続する点、「よ」と少し似ていますが、「よ」の方はもともと「正月だヨ」のようにいうのが普通なのに対し、「さ」は「だ」を受けることがないというわけで、やっぱりちがいます」と述べ、助詞「さ」には「だ」と同じく措定詞としての職能があることを強調している。

以上から、手懸りに従って、佐久間（1943）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は措定詞。「である」の「で」は措定詞、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用は、「だ」「だっ」「なら」「だろう」「で」。佐久間は「で」を「だ」の活用形と認めた最初の人物である。
- ③「の」を「だ」の活用形としない。
- ④助詞の「さ」も「だ」の代理をすることができるので、措定詞の一つだとした。つまり「アノ人ハ病気サ」の「さ」の前に「だ」は存在せず、「病気」を述語に

するのは「さ」だとしている。

- ⑤「名詞+措定詞」を述語の一つとした。ただし佐久間の措定詞は「だ」「です」「さ」。
- ⑥「だ」は、ほかの語と結んで接続詞を作り出すことができるとして、「前文代理的な役割」に言及した。
- ⑦「述語代用説」には言及していない。
- ⑧「だ」「です」の前は名詞、または形容動詞語幹の例文しか見当たらない。

第6節 三尾砂

三尾(1942)は、「だ」「です」を助動詞とするが、ほかに「である」「でございます」「でいらっしやる」もまたそれぞれ別の助動詞としている。その一方、「だの」や「だか」は助詞である(三尾1942:169)。また、「なんだ」「なんだらう」「なんです」「なんでせう」や「もんだから」「もんですから」などもそれぞれ独立した助動詞とする(三尾1942:170)。このように三尾(1942)の「だ」は何とおりもある。

「だ」の活用形は以下のとおりである。

(2-27)

	基本形 (終止)	連體形	假定形	推量形	中止形	過去形
[だ]	だ	な	なら(ば)	だらう らう	で	だつた

三尾(1942:169)

活用表には入っていないが、三尾(1942)は、「の」が「だ」の活用形である可能性を示唆した最初の人物である。

(2-28)

〔中略〕話言葉では、この「な」の用法のせまい²³といふことが非常に不便なのです。これは日本語の文構造において、最も大きな弱点の一つといへばいへるものでせう。しかし、われわれは、その不便を幾分なりとも軽減するために、それに代るものとして、「の」をつかつてゐます。この「の」が、「だ」の連體形の缺陷の幾分かを補つてゐるのです。

雪舟が子供の時の話です。

英世が三才の時のことであります。

酔へば追分を歌ひだすのがおきまりのおちいさんです。

濱へ出てはなぎさに流れてくる木ぎれや炭を拾ふのが仕事の、年とつた祖母をかへてゐた。

中村さんがとてもよく御存じの方なんですつて。

旅行は鎌倉へ行つたのがたゞ一度つきりの、いはゞ籠の鳥さ。

金満家で生物學者の彼は、金にあかして資料をあつめた。

大きなのがじまんの大蛙は、うんといきを吸ひこんで、おなかをふくらましました。

右の例は、「…である」「…であつた」の意味に用ひられた「の」です。つまり、「だ」の連體形のやうな役目をしてゐる「の」であります。これらの「の」は、體言と體言の間に立つ普通の「の」とは性質がちがつてゐます。普通のさういふ種類の「の」は

ゲーテの著作、父の妹の連合ひ

母の愛、子供の教育、あこがれの涙

羊の一群、机の上

のやうに、なんらかの意味で二つの體言が相屬關係にあることを示すものです。

三尾²⁴(1942:173-174)

三尾(1942)も佐久間(1943)同様、「だ」

²³三尾(1942:171)によれば、連體形「な」は「の」「もの」「もんで」「もんだから」「もんですから」「もんでございますから」「だけ」「ばかり」などにしか接続することができないという意味。

²⁴下線は三尾(1942)。

の活用形の一つに「で」を認めている。三尾は中止形「で」の例として次のようなものを挙げている。一部を引用しておく。

(2-29)

今日は日曜日で、こうあほうこう日です。
 (『よみかた』三)

内に居ると大威張りの癖に、外へ出ちやしゞみつ貝で、からつきし、意氣地がないんですから。(『戀を知る頃』)

うちの人は七人で、あとはてつだひの人です。(『カツノホン』三)

三尾 (1942:188-189)

三尾は「だ」「です」を佐久間博士は『前文代理的な役割』をするものだと述べられてゐますが(三尾 1942:208)と断った上で、三尾自身も「だ」の持つ「前文代理的な役割」を認めた。その例として、「僕は君を尊敬してゐる。尊敬してゐるから救ひに来た」(三尾 1942:207)という文は、「僕は君を尊敬してゐる。だから救ひに来た」(三尾 1942:209)と言えることを挙げた。

三尾(1942)は、「だ體」での問の出しかたは、動詞形容詞の場合は、そのおしまひに「か」をつければよく、體言や「な」形容詞、「の」形容詞の場合には「だ」のつく場所へ、「だ」を略して、かほりに「か」をつける」(三尾 1942:221)と述べて、助詞「か」の前では「だ」を略すのだとした。しかしながら、助詞の「よ」については、「高樹町は、とにかく苦手よ。」「スケートもやめる覚悟よ。」(三尾 1942:417)などの例を挙げ、「體言その他に直接に「よ」を付け」(三尾 1942:417)する場合があったとした。その上で「「よ」は、「さ」や「ね」とともに、「だ」に似た叙述機能を持つものと考へることもできませう。つまり、「だ」の代理的役目ができるものとも

いへませう」(三尾 1942:418)と述べている。すなわち、三尾によれば「苦手よ」と言った場合、「苦手」を述語にする役割を担っているのは、助詞「よ」であって、「だ」ではない。このあたりの考え方は、佐久間(1943)に近い。佐久間は特に「さ」だけを取り上げ、これを活用のない措定詞としたが、三尾は「さ」に加え、「よ」や「ね」も叙述機能を持つ、つまり名詞を述語にする力を持つのだと積極的に述べている。

三尾(1942)は、「だ」「です」の前に名詞や形容動詞語幹以外に、次のような名詞句が来る場合があることに気がついた。このことはこれまで考察してきた文法家が指摘しなかったことである。

(2-30)

これが僕のだ。

これ、僕にですか。

これはお母さんから、これはお姉さんからです。

三尾 (1942:199,228)

ここまでは三尾(1942)の記述である。

三尾(1942)にはなかったが、三尾(1948)は、次の記述のように、「だ」のある文を展開させて「内容を盛つた文」(三尾1948:102)に言い換えることができると述べた。

(2-31)

「火事だ!」「自動車だ!」「おおかみだ!」に用いられる「だ」は、「AはBだ[◎]」の「だ」とはちがつたものである。判断文の「AはBだ[◎]」の「だ」は陳述作用をあらわすものであるが、「火事だ!」の「だ」は、思いがけない存在や生起を驚きを以てさけぶ「だ」である。

火事だ!

は
火事がおこっている。

であり、
自動車だ！

は
自動車がきた！

である。すなわち助詞「は」と共にある判断の「だ」ではなくて、助詞「が」と共にある現象の「だ」とよぶべきものである。

三尾²⁵ (1948:104-105)

この記述をもって、三尾(1948)が「だ」の「述語代用説」に言及したと見ることもできる。ただ、三尾は、展開して「内容を盛った文」に言い換えることができるのは、必ずしも「だ」だけが持つ機能だと考えていたわけではなさそうである。それは次の記述から読み取れる。

(2-32)

あ！
梅の花を見て「あ！」といったのなら

梅が咲いている。
というふうに展開させることができる。「しつかり勉強しなさい」といわれて

はい。
といったのなら、その「はい」の内容は、
しつかり勉強します。

というふうに展開できる。

三尾 (1948:102)

以上から、手懸りに従って、三尾(1942)の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は助動詞。「である」も一つの助動詞。

²⁵原文どおり引用したが、一部1点しんじょうとなっているところがある。◎も原文どおり。◎は、その文が、三尾の言うところの「判断文」であることを表すマークである。

- ②「だ」の活用は、「だ」「だっ」「な」「なら」「だろう」「で」。

- ③連体形「な」の代用としての「の」を認め、「雪舟が子供の時」のような例を挙げ、それは「机の上」の「の」とは違うことを述べた。

- ④助詞の「さ」や「よ」、「ね」も「だ」の代理をすることができると思った。

- ⑤「だ」は體言だとか「な・の」形容詞の語幹だとか、そのほか叙述の力のない語が述語に用ひられるときに、それを助けて動詞のやうな働きをさせるもの」(三尾1942:197)と述べている。

- ⑥「前文代理的な役割」に言及した。

- ⑦明確に述語の代用とは述べていないが、「火事だ」は「火事がおこっている」に展開できるという考えを、三尾(1948)で述べた。

- ⑧「お姉さんからです」のように、「だ」「です」の前に名詞以外のものが来る例を挙げた。

第7節 時枝誠記

時枝(1950)は形容動詞を立てない。これを名詞に指定の助動詞「だ」のついたものと解釈する。

(2-33)

「静か」「丈夫」を一語とするならば、「静かな」「静かだ」或いは「丈夫に」「丈夫で」「丈夫なら」に於ける「なら」「で」「に」「だ」を何と見るべきかといふに、本書では、これを指定の助動詞「だ」の活用系列と考へたのである。即ち、「静かな」「丈夫に」は、「静か」「丈夫」といふ語形の變化しない語、即ち體言に、指定の助動詞の附いたものと考へたのである。このことについては、後章指定の助動詞の項を参照せられたいが、右のやう

にして、いはゆる形容動詞は、一般に體言(名詞)に指定の助動詞の附いたものと全く同等に取扱はれることとなるのである。

時枝 (1950:131)

そして、指定の助動詞「だ」の活用を次のようだとした。

(2-34)

未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
で	で、に、と	だ	な、の	なら	○

指定の助動詞は、話手の單純な肯定判断を表はす語である。この中、「に」「と」「の」は、従來助詞として取扱はれてゐたものであるが、下に擧げる例によつて知られるやうに、そこには明かに陳述性が認められるので、これを助動詞として認めるのが正しいであらう。また、右²⁶の表に掲げた各活用形は、その起源に於いては、それぞれ異なつた體系に属する語であつたであらうが、今日に於いては、一の體系として用ゐられるやうになつたものである。本書に於いては、形容動詞を立てないから、従來形容動詞の語尾と考へられてゐた「だら」「だつ」「で」「に」「だ」「な」「なら」は、そのまま、或は分析されて、すべて右の活用形に所屬させることが出来る²⁷。次に用例を活用形に従つて掲げることとする。

未然形

體が健康でない。

連用形

體が健康である。「ある」は指定の助動詞であるから、この場合は二重指定の表現といふことが出来る)

體が健康であらう。(健康だらう)

體が健康で、性質が愉快だ。(中止の場合)

私は健康で働いてゐます。(連用修飾的陳述を表はす場合)

月明かに、風涼し。(中止の場合、文語だけに用ゐられる)

元氣に、愉快に、働いてゐる。(連用修飾的陳述を表はす)

隊伍整然と行進する。(連用修飾的陳述を表はす)

花が雪と散つてゐる。(右に同じ)

「今日は行かない」と云つてゐた。(右に同じ)

野となく、山となくかけまはる。

終止形

今日は日曜だ。

連體形

それが駄目な時。

僅かの御禮しか出来ない。

假定形

明日がおひまなら、お出かけ下さい。

氣分が悪いなら、お止めなさい。

あながた行くなら、一緒に行きませう。

時枝 (1950:183-185)

時枝は「で」を「だ」の活用形としたが、「ある」もまた指定の助動詞とした。よつて「である」は二重指定となった。

時枝は連用形に「に」と「と」を入れた。時枝の「に」は、「元氣に」「愉快に」という例文からわかるやうに一般に形容動詞とされているものの一部である。時枝の「に」が、「病氣になりました」のやうな「に」を含むのかどうか定かではない。「整然と行進する」の「と」は形容動詞の一部とも考えられるものである。また、一般に引用の「と」と呼ばれる助詞も「だ」の活用形に入れている。

連體形には「の」を入れ、「僅かの御礼」を例に挙げた。しかしこの部分の注釈には次のやうに書かれている。

²⁶ 原文では「右」だが、本稿では上の表を指す。「だらう」は推量の助動詞として別に扱われる。

²⁷ 「だつ」がどうなつたかは不明。

(2-35)

「な」「の」は、屢々共通して用いられるが、語によつて、「な」の附く場合と「の」の附く場合とがある。「駄目の」「僅かな」とも言うことが出来るが、「突然」「焦眉」「混濁」等には「の」がつき、「親切」「孤独」「あやふや」等には、大體に「な」がつくやうである。

時枝 (1950:187)

このように、時枝がここに「の」を入れたのは、「僅かな御礼」とも「僅かの御礼」とも言うことができるという理由である。この「の」は「友達ノ池田サン」の「の」ではない。このことは奥津 (1978) も指摘しているとおりである。

一方、この活用表には「だろう」はない。「だろう」はこの活用パラダイムに入れず、「別に推量の助動詞として」(時枝1950:186)扱われる。

時枝 (1950:259) は「用言に零記號の陳述を想定」する。次の時枝の説明は、本研究にとっては重要な記述である。

(2-36)

陳述は次のやうな零記號に於いて表現されてみると見ることが出来るのである。

犬が走る■

氣候が暖い■

右のやうな説明法は、「故郷の山よ」といふ表現に於いて、感動を表はす「よ」が表現されず、「故郷の山！」と表現された場合、これを

故郷の山■

として圖解説明するのと同じである。

以上のやうに、國語に於いては、用言は常にそれだけで別に陳述を表はす語を伴わずに陳述的表現とすることが出来るのであるが、

方言の中には、「犬が走るだ」といふやうに、「だ」を以て陳述を表はしたり、「犬が走るです」「氣候が暖いです」といふ風に、「です」を以て陳述を表現することがある。また、「日中は暖かい。だが朝晩は冷える。」といふように、前文を受けて、これを繰返す場合に、ただ陳述だけを繰返して、「だが」といふことがある。この場合「だ」は前文の零記號の顯現したものと見ることが出来るのである。また、「朝晩は冷える。」といふ表現は、聞手に對する敬意を含める時、「朝晩は冷えます。」といふ表現をとる。「ます」は、「だ」「です」と同様に、零記號の陳述が、語の形式をとつて現れたものと解することが出来るのである。

時枝 (1950:258-259)

このように時枝は「故郷の山！」という表現では、「山」の後ろに「だ」が零記號の形で存在するのだと述べた。つまり「だ」は見えていないが、そこにゼロという形で存在しているということである。これは、ここまで見てきた文法家の見解には見られなかったものである。時枝は、このような零記號の陳述には、「だ」「です」以外に「ます」があり、名詞ばかりでなく、動詞や形容詞の後ろにも零記號の陳述があるのだとした。したがって、述語とは「すべて陳述の助動詞或は零記號の陳述によつて統一されたもの」(時枝1950:263)であると述べた。

ただ、時枝 (1950) の述語は、単に「名詞+零記號の陳述」というわけにはいかない。「彼は勉強家です」という文は、入子型構造によって「彼は勉強家」の部分が述語である(時枝 1950:265)と述べた。時枝の「です」は零記號の陳述であり、述語の一部には含まれない。

一方、(2-36) で引用したように、時枝 (1950) は「だ」の「前文代理的な役割」に

については認めている。「日中は暖い。だが朝晩は冷える。」という文で、「だ」は前文の零記号が顕現化したものだと時枝は述べている。以上から、手懸りに従って、時枝（1950）の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」は指定の助動詞。「である」の「で」は指定の助動詞、「ある」も指定の助動詞。よって「である」は「で」と「ある」の二重指定である。
- ②「だ」の活用は、「だ」「で」「に」「と」「な」「の」「なら」。
- ③「の」を「だ」の活用形としたが、それは「駄目なとき」「駄目のとき」というようにどちらも言える語があるからであり、特に「友達ノ池田サン」の「の」を指したのではない。
- ④ 故郷の山 ■ の ■ には、「だ」「です」という零記号の陳述が隠されていると述べている。時枝は「だ」がゼロという形でここに存在していると考えた。本研究で考えてきた「アノ人ハ病気サ」という文は、時枝によれば 病気 ■ というように零記号の陳述があるということになる。
- ⑤ 述語とは「すべて陳述の助動詞或は零記号の陳述によつて統一されたもの」と述べ、犬が走る ■、気候が暖い ■、故郷の山 ■ の3タイプを挙げた。ただし「彼は勉強家です」という文は、「彼は勉強家」の部分が述語であると述べている。
- ⑥「日中は暖い。だが朝晩は冷える。」という例文で、「前文代理的な役割」に言及した。
- ⑦「述語代用説」には明確な言及は見られない。
- ⑧「犬が走る」「気候が暖い」も後ろに「だ」「です」があると述べた。しかし「だ」の前に名詞句が来るような例は挙げていない。

以上、ここまで20世紀前半の「だ」の記述を考察してきた。このように「だ」は、文法諸家によって実に多種多様であった。

第3章. Bloch以降の「だ」の記述

第1節. Bernard Bloch

日本国内で「だ」の実体をめぐって文法家が頭を悩ませている中、科学的で体系的かつ明快な答えをもたらしたのがBlochである。次にBloch（1946b）の「だ」について考察していきたい。

Bloch（1946b）は、「だ」と「です」の二つをコピュラとする。

Bloch（1946b:207）は、‘The Predicate’の中で、‘Every predicate contains an INFLECTED WORD as its NUCLEUS.’（拙訳：述語は全て核となる活用語を持つ）と述べ、‘The nucleus of a predicate, together with all preceding word within the predicate, is an INFLECTED EXPRESSION. According as the nucleus is a verb, an adjective, or the copula, the inflected expression is a VERBAL EXPRESSION, an ADJECTIVE EXPRESSION, or a COPULAR EXPRESSION.’（Bloch 1946b:208）（拙訳：述語の核と述語内で核に先行するすべての語を合わせたものが活用表現である。述語の核が動詞、形容詞またはコピュラであるのに応じて、活用表現は動詞表現、形容詞表現またはコピュラ表現となる）として、述語を明確に3本立てとした。

述語3本立ては、Blochの日本語教科書 *Spoken Japanese*（以下、SJと略す）でも学習者に向けて説明された。

(3-1)

A sentence may consist of a single clause, or of several clauses strung together. In each clause, the smallest part that could be used as

a complete clause all by itself is called the PREDICATE. This may be a verb or a verb phrase, an adjective, or a copula with some other word before it—in each case with or without a following particle.

Some clauses consist of a predicate alone; in others, the predicate is preceded by one or more one phrases or other elements, none of which could be used alone without the predicate. The predicate of a final clause can be a complete sentence by itself.

Bloch&Jorden (1945:138)

(拙訳) 一つまたはそれ以上の節が結合して文を構成する。それだけで完全な節になれる最小部分のことを述語と呼ぶ。これは動詞または動詞句、形容詞、そしてコピュラの前にほかの語がついたものである。また、どの場合にもその後ろに助詞が付いたり付かなかったりする。一つの述語だけで節になるものもある。述語の前に一つまたはそれ以上の句やほかの要素が先行することもあるが、述語がないものは節にはなれない。最終節の述語は単独で文になれる。

このように Bloch (1946b) は述語こそが文の要であると考えた。その述語を担うものとして動詞または動詞句、形容詞、そしてコピュラの前にほかの語がついたものを挙げた。ただし、‘Dóno tatémono ga, teisyaba désu ka’ (Bloch1946b:237) という質問に対して、‘Ano sirói, tatémono desu’を、‘Ano sirói tatémono’とだけ答えた場合については、述語を欠くものとして Minor Sentence というカテゴリーに入れた。一方、述語があるものを Major Sentence とした。

「だ」「です」の前に来るのは名詞だけではない。Bloch (1946b) は次のように述べ、「だ」「です」の前に様々な形が来ることを指

摘した。

(3-2)

(1) By a noun or other type of substantive expression²⁸.

Examples: *heitai dá* ‘is a soldier’; *sóo da* ‘is so’; *watakusi no, boosi dá* ‘is my hat’; *kádo ni, áru, ano sírokute, tiisái uti dá* ‘is that small white house (which is) on the corner’; *nedañ ni, yotté da* ‘is dependent on the price’; *señsoo ni túite da* ‘is about the war’.

(拙訳) 「だ」「です」の前に名詞やある種の実詞表現が来るもの。例：「兵隊だ」「そうだ」「わたくしの帽子だ」「角にあるあの白くて小さいうちだ」「値段によってだ」「戦争についてだ」

(2) By a relational phrase²⁹.

Examples: *watakusi nó da* ‘is mine’; *Tookyoo kára da* ‘is from Tokyo’; *Tookyoo kára no da* ‘is the one from Tokyo’; *tomodati no, musumé no da* ‘is [my] friend’s daughter’s’; *bangóhañ o, tábete kara dátta* ‘it was after eating dinner’.

(拙訳) 「だ」「です」の前に関係句が来るもの。例：「わたくしのだ」「東京からだ」「東京からのだ」「友達のだ」「晩御飯を食べてからだだった」

(3) By an indicative inflected expression. The following examples illustrate all the common

²⁸ Substantive expressions are of two kinds: noun expressions and pseudo-clauses. (Bloch1946b:223) (拙訳：実詞表現には名詞表現と疑似節の2種類がある。)「実詞表現」「疑似節」の訳語はロイ・A・ミラー著林栄一監訳(1975)のものを用いた。Bloch (1946b) は「-ながら」「-次第」、「-たり形」「-て形」、不定詞形を疑似節とした。

²⁹ A RELATIONAL PHRASE has two immediate constituents: an element called the *relatum*, and a following particle. The *RELATUM* is most commonly a noun or other type of substantive expression. (拙訳：関係句とは二つの直接構成要素を持つ。リレータムと呼ばれる要素と後続する助詞である。リレータムは一般的に名詞または実詞表現であることが多い。)「関係句」という訳語はロイ・A・ミラー著林栄一監訳(1975)のものを用いた。

combinations of an indicative form with an indicative, presumptive, or hypothetical copula; *tabéru* 'eats' and *samúii* 'is cold' represent all verbs and all adjectives respectively. With an indicative copula as nucleus: *samúii desu* 'is cold', *samúii desita* 'was cold', *sámukatta desu* 'was cold'; with a presumptive as nucleus: *tabéru daroo* or *tabéru desyoo* 'will probably eat', *samúii daroo* or *samúii desyoo* 'will probably be cold', *tábeta daroo* or *tábeta desyoo* 'probably ate', *sámukatta daroo* or *sámukatta desyoo* 'probably was cold', (*heitai*) *dátta daroo* or (*heitai*) *dátta desyoo* 'was probably (a soldier)'; with a hypothetical copula as nucleus: *tabéru nara* or *tabéru naraba* 'if [someone] eats', *tábeta nara* or *tábeta naraba* 'if [someone] ate', *samúii nara* or *samúii naraba* 'if it is cold'. Other examples: *sámuku náru daroo* 'will probably grow cold', *arúite iku daroo* 'will probably go on foot', *túyoku nari tái daroo* 'probably wants to grow strong', *arúite ikitaku nákata daroo* 'probably did not want to go on foot'.

(拙訳)「だ」「です」の前に直説形活用表現が来るもの。以下の例は直説形活用表現に直説形、推量形、仮定形のコピュラが来るものである。「食べる」と「寒い」はそれぞれ動詞と形容詞を代表する例として使った。述語の核がコピュラの直説形であるもの：「寒いです」「寒いでした」「寒かったです」述語の核がコピュラの推量形であるもの：「食べるだろう／食べるでしょう」「寒いだろう／寒いでしょう」「食べただろう／食べたでしょう」「寒かっただろう／寒かっただしょう」「兵隊だっただろう／兵隊だっただしょう」述語の核がコピュラの仮定形であるもの：「食べるなら／食べるならば」「食べたなら／食べたならば」「寒いなら／寒いならば」そ

の他：「寒くなるだろう」「歩いて行くだろう」「強くなりたいたろう」「歩いて行きたくなかっただろう」

(4) By an indicative inflected expression with a clause particle following.

Examples: *tábeta kara da* 'it is because [someone] ate', *tábeta iru kara da* 'it is because [someone] is eating', *sámuku nái kara da* 'it is because it is not cold'.

(拙訳)「だ」「です」の前に「活用表現の直説形+節助詞」が来るもの。「食べたからだ」「食べているからだ」「寒くないからだ」

Bloch³⁰ (1946b:212-213)

Bloch (1946b:213) は「である」「であった」「であります」などは、それぞれコピュラと動詞が一体化したものと述べた。

Bloch (1946a) は Plain Copula の「だ」と Polite Copula の「です」は、次のように命令形と不定詞形を除く 8 カテゴリーに活用するとしている。

(3-3)

Non-past indicative (直説形 ³¹ ・非過去)	(dá, na, no)	désu
Non-past presumptive (推量形・非過去)	daroo	desyoo
Provisional (与件形)	(nára/ nára)	—
Past indicative (直説形・過去)	dáqta ³²	desita
Past presumptive (推量形・過去)	dáqtaroo	desitaroo
Conditional (条件形)	dáqtara	desitara
Alternative (選択形)	dáqtari	desitari
Gerund (動名詞形)	(dé)	desite

Bloch (1946a:108)

³⁰ 原文どおり引用した。斜字体も原文どおり。Bloch は日本語部分を斜字体で示すので、以下、そのまま引用することとする。

³¹ この 8 カテゴリーの訳語は、ロイ・A・ミラー編林栄一監訳 (1975) のものをそのまま使用した。

³² 'q' は「っ」を表している。

表の中の「な」は、‘*taihen sızukana tokoro*’ (Bloch&Jorden 1945:289) のような場合の「な」である。Blochは形容動詞を立てず、名詞の一分類とする。また‘*heitai ná no da or heitai ná n̄ da*’の「な」のように「の」や「ん」の前の「な」も「だ」の交替形とする。「で」は‘*Otokó no ko wa hássai de, onná no ko wa gósai desu.*’ (Bloch&Jorden 1945:266) のような「で」をコンピュータのGerundとした。

一方、「に」はコンピュータの活用形には入れなかった。例えば‘*Sızuka ni arııte kudasai*’ (Bloch&Jorden 1945:291), ‘*byooki ni narımá sita*’ (Bloch&Jorden 1945:75-76), ‘*nán de mo sitte isoo ni miemásu*’ (Bloch&Jorden 1946:722) などの「に」は全て助詞であるとし、一貫して助詞でとおした。

「の」は‘*tomodati no Tanaka-sań*’, ‘*seńsei no Kurıhara Yoneo*’ (Bloch&Jorden 1945:270) などの例を挙げ、こうした「の」を「だ」の交替形だとした。

また、「だ」のゼロ交替形を認めた。助詞「か」の前でコンピュータの「だ」はゼロ交替形として存在すると述べている。

(3-4)

Before the particle *ka*, the non-past indicative of the copula, *dá*, is replaced by a zero alternant (i.e. drops out); e.g. *Heitai ka, súiheı ka siranai* ‘I don’t know whether he is a soldier or a sailor’ (cf. *Heitai dáttá ka, súiheı dáttá ka siranai* ‘I don’t know whether he was a soldier of a sailor’, with the past indicative of the copula before *ka*.)

Bloch (1946b:213)

(拙訳) 助詞「か」の前で、非過去直説形のコピュラ「だ」は、ゼロ交替形に代わる。例：「兵隊のか水兵のか知らない。」(参考：「か」の前で過去直説形のコピュラは残る「兵隊だっ

たか水平だったか知らない。』)

助詞の前でコンピュータがゼロ交替形になる現象は、SJでも繰り返し説明された。

(3-5)

However, if the original question ends with a noun plus *désu ka*, the quoted question before *to* will usually end either in the same way or simply with a noun plus *ka*; THE PLAIN PRESENT FORM OF THE COPULA (*dá*) IS NOT NORMALLY USED BEFORE THE PARTICLE *ka*. Notice the following two sentences:

(a) I asked if he was a soldier.

Anó hito wa heitai désu ka to kıkımásıta.

(b) I asked if he was a soldier.

Anó hito wa heitai ká to kıkımásıta.

Bloch&Jorden (1946:436)

(拙訳) しかしながら、もとの質問が「名詞+ですか」で終るとき、「と」の前の引用疑問文は普通同じ形で終るか、もしくは「名詞+か」で終る。コンピュータの普通体の現在形(だ)は、助詞「か」の前では使われないのが普通である。下の二つの文に気をつけよう。

(a)あの方は兵隊ですかと聞きました。

(b)あの方は兵隊かと聞きました。

(3-6)

The plain present form of the copula, *dá*, is normally omitted before the particle *ka*. Compare the following two sentences:

(c) Is he a doctor or a teacher? *Anó hito wa, isya désu ka, senséı desu ka?*

(d) I don’t know whether he’s a doctor or a teacher. *Anó hito wa, isya ka senséı ka sirımaséń.*

Bloch&Jorden (1946:453)

(拙訳) コピュラの普通体の現在形「だ」は、助詞「か」の前で省かれる。二つの文を比べてみよう。

(c) あの人は、医者ですか、先生ですか。

(d) あの人は、医者か先生か知りません。

(3-7)

(7) *heitai ka mo sirenai*

(9) *heitai kara ka mo sirenai*

(10) *heitai no ka mo sirenai*

In example(7), (9), and (10), notice that the plain present tense of the copula (*da*) is omitted before *ka*;

Bloch&Jorden (1946:540)

(拙訳)

(7) 兵隊かもしれない

(9) 兵隊からかもしれない

(10) 兵隊のかかもしれない

(7),(9),(10)の例で、コピュラの普通体の現在形「だ」は、助詞「か」の前で省かれる。

「だ」は常に落ちるわけではなく、残る場合もある。‘*Soo da soo desu nee.*’ (Bloch & Jorden 1946:380) は「そう」の前で「だ」が残る例で、Blochはこの例が‘tricky’に聞こえるとして面白かった。

このように、Bloch (1946b) は、助詞「か」の前に「だ」のゼロ交替形があることを想定した。Bloch (1946b) に従えば、「アノ人ハ病気サ」という文は「アノ人ハ病気⁰サ」となり、名詞「病気」を述語にする役割を担っているのは「だ」のゼロ交替形である。「病気」という名詞でもないし、「サ」でもない。この発見がいかにか大きいかは、第2章で取り上げた6人の文法家の考察を思い出せば明らかである。念のためここで再確認しておこう。

山田 (1922): 「名詞+助詞」も直ちに述語である。

松下 (1930): 名詞そのものが叙述的用法を持っている。

橋本 (1948a): 助動詞「だ」「です」「だろう」「ようだ」「らしい」や第3種の助詞は名詞を述語にすることができる。

佐久間 (1943): 助詞「さ」も措定詞であり、名詞を述語にする。

三尾 (1942): 助詞「さ」のほか、「よ」や「ね」も名詞を述語にする。

時枝(1950): 「故郷の山■」の■に零記号の陳述が隠されている。

時枝 (1950) は、Bloch (1946b) より時代は後だが、大変興味深いものである。ただBloch (1946b) に比べると複雑である。例えば「日中は暖かい。だが朝晩は冷える。」という例において、「だ」は前文の零記号が顕現したと言うが、そう説明するよりは、「だ」が前文を受けていると言った方がわかりやすい。動詞の後ろにも■を想定し、「犬が走るだ」というのも方言にあると述べているが、この場合、陳述を担っているのはやはり動詞「走る」であり、「だ」ではないように思える。「走ります」と言えば「ます」は丁寧にする役割であって、陳述部ではないように感じる。時枝の説明は、とてもおもしろいものではあるが、日本語は、動詞、形容詞、名詞の後ろに見えないものが隠されているという説明は、日本語学習者にとってはわかりにくいものであろう。

次に「述語代用説」だが、SJでは次のように述べ、「どこですか」と「どこにありますか」は、厳密には意味が異なると学習者に向けて説明している。

(3-8)

The question *dóko desu ka* is often more SPECIFIC than *dóko ni arimásu ka*. To ask where some kind of place can be found, you say *Dóko ni arimásu ka?* To ask where a particular place is, you say *Dóko desu ka?*

Bloch&Jorden (1945:201)

(拙訳)「どこですか」という質問は、「どこにありますか」よりも具体的である。探しているある種の場所を聞くときには、「どこにありますか」を使い、特定の場所を聞くときには「どこですか」を使う。

一方、「疑問詞+でも」の説明の中では、‘*dáre de mo*’, ‘*dóre de mo*’などの例を挙げた上で、次のように述べている。

(3-9)

The word *dé* in these combinations is the gerund of the copula. In its place, you can use the gerund of a verb or an adjectives, without affecting the generalized or all-inclusive meaning of the expression.

dáre ga kite mo …whoever comes; no matter who comes

dáre ni kiité mo …whomever [I] ask; no matter whom [I]ask

dáre o mite mo …whomever [I] see; no matter whom [I]see

Bloch&Jorden (1946:480)

(拙訳)「だれでも」「どれでも」などに現れる「で」は、コピュラの動名詞形である。この「で」を動詞や形容詞の動名詞形で置き換えることもできるが、その場合でも、表現の一般的かつ包括的な意味に影響を与えることはない。

誰が来ても

誰に聞いても

誰を見ても

(3-8)と(3-9)の引用部から、Blochは「だ」や、その活用形「で」がほかの述語で代用できるととらえていたと一応考えることができる。ただ、(3-8)の引用では、述語を「だ」で置き換えると、意味が若干異なるのだと述べている。このようにBlochは述語代用説に近いことを述べてはいるのだが、二つの文の意味の違いにはこだわった。

一方、「だ」が持つ「前文代理的な役割」については‘*Dé mo and kéredomo*’の項で次のように述べている。

(3-10)

312. Anyway, I'll wear a hat. *Dé mo, boosi wa kabútte ikimasyóo.*

The expression *dé mo* in sentence 312 consists of the gerund of the copula plus the particle *mo*. It is an abbreviation of *soo demo* or *sore demo*, meaning literally ‘even if it is so’ or ‘even if it is that’.

Bloch&Jorden (1945:327)

(拙訳) 312. でも、帽子はかぶっていきましょう。

この文の「でも」はコピュラの「で」と助詞の「も」から成る。これは「それでも」もしくは「それでも」の短くなった形で、意味は文字どおり「例えそれでも」ということを表す。

この説明から、Blochは「でも」を「それでも」または「それでも」が短くなった形だと述べ、コピュラの「で」そのものが前文を代理するとは述べていない。Blochの説明だと、あくまでも前文を受けるのは「そう」「それ」ということになる。一方、Bloch (1946b) は *dá kara*, *dé wa* をコピュラ「だ」

から出来た接続詞であると述べている。

以上から、手懸りに従って、Bloch (1946b) の研究をまとめておきたい。

- ①「だ」はコピュラ。「である」の「で」はコピュラ、「ある」は動詞。
- ②「だ」の活用に「で」のほか、「な」や「の」も入れるが、「に」はここには入れない。
- ③「の」を「だ」の活用形とした。
- ④助詞「か」の前で、「だ」はゼロ交替形になると述べた。
- ⑤述語とは動詞表現、形容詞表現、コピュラ表現の3種類。
- ⑥'da kara', 'de wa'が「だ」からできた接続詞であることは述べたが、「だ」が前文を代理するとは明確には述べていない。
- ⑦「述語代用説」に近いことは述べたが、厳密には意味が異なる場合もあると述べた。
- ⑧「だ」の前は名詞ばかりではなく、「戦争についてだ」「東京からだ」などの表現もあることを指摘した。

第2節 Eleanor Harz Jordan

次にJordanによってBloch (1946b) はどのように継承されたのかを検討していきたい。

Jordan (1987a, b) の述語は3本立てである。Bloch (1946b) は「だ」「です」の前に来るものは名詞だけではないことを明らかにしたが、Jordan (1987a) では、まず早い段階で「名詞+です」を述語一つの柱として導入している。

(3-11)

A predicate, you will remember, is a verbal expression, or an adjective expression, or a /nominal+ désu/ expression.

Jordan (1987a:86)

(拙訳) 述語は、動詞表現、形容詞表現、「名詞+です」表現である。

その後、Jordanは「名詞+です」を「名詞+句助詞+です」というパターンに拡大する。

(3-12)

/NOMINAL+PHRASE-PARTICLE+ désu/

We will now extend our definition of the nominal predicate to include both /nominal+ désu/ and /nominal+phrase-particle+ désu/. [中略]

yo-zi-han made desu.

Jordan (1987a:208)

(拙訳) 「名詞+句助詞+です」

今、名詞述語の定義を拡大し、「名詞+です」と「名詞+句助詞+です」を含むものとします。4時半までです。

このようにして、Bloch (1946b) を忠実に継承しつつ、学習者に配慮した導入順序とした。

Bloch (1946b) は「だ」のゼロ交替形を認め、SJでは「だ」が助詞「か」の前で脱落するとして学習者に提示したが、「だ」がなくなったり残ったりする現象をさらに追究したのは、Jordanである。

(3-13)

dà—an extremely unstable form which is dropped in a number of contexts—is lost.

(拙訳) 「だ」はとても不安定な形であるので、多くの文で脱落、つまり失われるのです。

Jordan (1987a:227)

(3-14)

Dà may also be dropped in sentence-final position, or before most sentence-particles. In

other words, the direct-style equivalent of *Sôo desu*. may be *Sôo da*. or *Sôo*.; of *Sôo desu ne!*, either *Sôo da ne!* or *Sôo ne!* ; but of *sôo desu kedo*, only *sôo da kedo* (since *kedo* is not a sentence-particle.)

Jorden (1987a:227)

(拙訳)「だ」は文の最後や多くの終助詞の前で失われる。つまり「そうです」は「そうだ」か「そう」になる。「そうですね！」は「そうだね！」か「そうね！」になる。でも「そうですけど」は「そうだけど」になる。(なぜなら「けど」は終助詞ではないから。)

(3-15)

X dà yo and *X da né(e)* are markedly blunt; *X yo* and *X né(e)*, with *dà* dropped, are more gentle.

(拙訳)「Xだよ」と「Xだね」は特にぶっきらぼうな言い方だ。「だ」が脱落した「Xよ」と「Xね(え)」はより穏やかな言い方だ。

Jorden (1987a:228)

(3-16)

/kâ mo sirenai/

[...]However, *da*—that very unstable form—disappears here, too.

<i>yamèrù</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[someone] may quit’
<i>yamétà</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[someone] may have quit’
<i>takâi</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[it] may be expensive’
<i>tâkâkatta</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[it] may have been expensive’
<i>tâkâku nâi</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[it] may not be expensive’

<i>byooki</i>	+ <i>kâmo sirenai</i>
	‘[someone] may be sick’
<i>byoôki dàtta</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[someone] may have been sick’
<i>tomodati kara</i>	+ <i>kâmo sirenai</i>
	‘[it] may be from a friend’
<i>tomôdati dà kara</i>	+ <i>ka mo sirenai</i>
	‘[it] may be because s/he’s a friend’

Jorden (1987b:7)

(拙訳)「かもしれない」

[中略]「だ」はとても不安定な形なので、ここでも姿を消します。
やめるかもしれない。
やめたかもしれない。
高いかもしれない。
高かったかもしれない。
高くないかもしれない。
病気かもしれない。
病気だったかもしれない。
友達からかもしれない。
友達だからかもしれない。

Jordenは(3-16)のように、例文は必ず3種類の述語を使った文を出し、常に‘parallel’なものとして扱った。「友達からかもしれない」「友達だからかもしれない」という、「だ」があるかないかで意味が変わる秀逸な例文は、学習者にとって役立つものだったろう。「だ」が脱落したり残ったりする現象は規則的ではないので、日本語学習者は「だ」が現れるパターンを逐一覚えていかなければならないのである。

Jorden (1987a)は「だ」が残る場合も説明した。

(3-17)

/PREDICATE+sôo da/

Sôo is one of the very few nominals preceding which the *da* form of the copula (ending a sentence modifier) occurs in an unchanged form.

Gênki da soo desu.

Gênki datta soo desu.

Jorden (1987a:234-235)

(拙訳) 「そう」は文修飾の終りのコンピュータの「だ」がそのまま残る数少ない名詞のうちの一つである。「元気だそうです。」「元気だったそうです。」

以上のように, Jordenは「だ」について Bloch (1946b) を一歩進めた研究を行った。

Jordenは「だ」の活用表を明示していないものの、「の」を「だ」の活用形の一つとしている。この点は Bloch (1946b) と同じである。

(3-18)

When a sentence consisting of or ending with /nominal+dà/ occurs as a modifier of a following nominal, *dà* acquires the special form of *no*, unless the preceding nominal is a *na*-nominal, in which case it becomes *na*. Thus:

/byoóki dà + gakusee/ > *byooki no gakusee* 'a student who is sick', 'a sick student'

/gênki dà + kodomo/ > *gênki na kodomo* 'a child who is healthy', 'a healthy child'

Jorden (1987a:183)

(拙訳) 後続名詞の文修飾が「名詞+だ」で終るとき、「だ」は「の」という特別な形に

なる。ただし, 先行する名詞がナ名詞³³であるときは「な」という形をとる。

病気だ+学生>病気の学生

元気だ+学生>元気な学生

Jorden (1987a:183) は, '*nihónziñ no señsèe.*' という例を挙げ, 「の」が「だ」である場合と, 「の」が助詞である場合では意味が異なることを述べたが, これは Bloch (1946b) の継承である。

'*damê ni nâru*' (Jorden1987a:245) のような場合の「に」を助詞として扱っているのも, Bloch (1946b) と同じである。Jordenも「に」を一貫して助詞とした。

Jordenは, 「述語代用」という語は用いていないものの, 「です」と「あります」の説明の中で, 次のような例文を挙げている。

(3-19)

Kore wa pâi desu.

'This is *pie.*'

Tomodati wa pâi desu.

'My friend is [having] *pie.*'

Kyôo wa pâi desu.

'Today is *pie.*' (i.e., today's dessert)

Jorden (1987a:93)

以上のように Bloch を忠実に継承してきた Jorden であるが, Bloch (1946b) とは見解が異なる点もある。Jorden は, 「です」の前に「だ」を想定した。

(3-20)

onâzi dà + distal dèsu > (**onâzi dà desu*) > *onâzi dèsu.*

Jorden (1987a:226)

(拙訳) 同じだ+です>(同じだです)>同じです

³³ 普通, 日本語教育ではこれをナ形容詞というが, Jorden はこれを *na*-nominal と呼ぶ。これは Bloch がこれを名詞に分類したことに起因する。

(3-21)

yasumi da ‘[it] is or will be vacation’ >
 (**yasumi da desyoo*) > *yasumi desyoo*
 ‘[it] probably is or will be vacation’
 Once again the unstable *dà* is lost.

Jorden (1987a:230)

(拙訳) 休みだ > (休みだでしょう) > 休み
 でしょう
 ここでも不安定な「だ」は失われます。

Bloch (1946b) は、「だ」を普通体のコピュラ、「です」を丁寧体のコピュラとして扱ったので、「名詞+だ」と「名詞+です」は並列するものだった。Jorden は「だ」も「です」もコピュラと認めつつ、「名詞+「だ」のゼロ交替形+です」と考えている。とすると「同じです」は「同じ+ \emptyset +です」となり、コピュラが二つあるということになる。奥津 (1964a) も「N+ \emptyset +desu」と書いているが、奥津は「です」を助詞とする。この部分のみ Jorden と Bloch に考え方の違いがあり興味深いところである。

以上から、手懸りに従って、Jorden の研究をまとめておきたい。

- ① 「だ」はコピュラ。「である」の「で」はコピュラ、「ある」は動詞。
- ② 「だ」の活用は、表を明示してはいないが、Bloch とほぼ同じだと考えられる。つまり、「で」、「な」、「の」を活用パラダイムとするが、「に」はここには入れない。
- ③ 「の」を「だ」の交替形とした。
- ④ 助詞「か」だけでなく「よ」や「ね」などの前でも「だ」が脱落することを指摘した。その一方「けど」や「そう」の前では残ることを丁寧に学習者に説明した。
- ⑤ 述語とは動詞表現、形容詞表現、名詞表現の3種類。
- ⑥ 「でも」の「で」をコピュラとし、‘even so’ という訳を当てている。だが、Bloch 同様、「だ」そのものに前文を受ける機能があるとは述べていない。
- ⑦ 「述語代用説」という語は使っていないが、「友達はパイです」という例を挙げた。
- ⑧ 「だ」の前には、名詞のほか、句助詞が来ることも学習者に向けて説明した。

表1 妖怪「だ」の変遷

	品詞		「だ」の活用パラダイム				「の」=「だ」	アノ人ハ病気サ	述語	前文代 理機能	述語代 用説	「だ」の前
	「だ」	「である」	で	の	に	と						
山田 (1922)	説明存在詞	「で」助詞 「ある」説明存在詞	×	×	×	×	×	名詞+助詞も述語	「資格+形式用言」を述語の一つとした。	×	×	名詞、「の」、 形容動詞語幹
松下 (1930)	断定の助助辞	「で」断定の助助辞 「ある」動詞	×	×	×	×	×	名詞そのものに叙述性	□デスを「説明語」とした。	×	×	名詞、 形容動詞語幹
橋本 (1948a)	指定の助動詞	「で」助詞 「ある」動詞	×	×	×	×	×	助詞や「らしい」なども体言を述語にする。	用言(動詞、形容詞、形容動詞)が述語になるのが最も普通である。	×	×	名詞、 形容動詞語幹
佐久間 (1943)	指定期	「で」指定期 「ある」動詞	○	×	×	×	×	「さ」は、名詞を述語にする。	“説明的判断”は指定期を述語として表現される	○	×	名詞、 形容動詞語幹
三尾 (1942)	助動詞	助動詞	○	△	×	×	○	助詞「さ」のほか「よ」「ね」も名詞を述語にする。	名詞+助動詞、助詞	○	△	名詞句も来る
時枝 (1950)	指定の助動詞	「で」指定の助動詞 「ある」指定の助動詞	○	○	○	○	×	「故郷の山■」の■に帯記号の陳述がある。	陳述の助動詞或は帯記号の陳述によって統一されたもの	○	×	名詞のみ
Bloch (1946b)	コピュラ	「で」コピュラ 「ある」動詞	○	○	×	×	○	「サ」の前に「だ」のゼロ交替形が存在する。	名詞、関係句など+だ/です	△	△	名詞、実詞表現 関係句など
Jorden (1987)	コピュラ	「で」コピュラ 「ある」動詞	○	○	×	×	○	「サ」の前に「だ」のゼロ交替形が存在する。	名詞、関係句など+だ/です	△	○	名詞、実詞表現 関係句など

第4章 考察

以上の分析から、手懸りを一覧にしたものが下の表1である。表1を見ると、「だ」の全貌が山田からJordenに至るまで、だんだんと明らかになってきているのがよくわかる。はじめは「で」さえも活用形として考えられていなかったことが、不思議な感じさえする。

「だ」には実に様々な姿がある。あるときには「で」、あるときには「な」や「の」になる。あるときには姿が見えない。「アノ人ハ病気サ」という文において、名詞「病気」を述語にしているのは助詞「さ」ではない。「病気」と「さ」の間には何もないのではない。「だ」がゼロという形で存在しているのだ。そのことを明らかにしたのがBloch (1946b)である。Bloch (1946b)は「だ」のゼロ交替形を認めた。これは構造主義言語学理論の見事な適用であった。

Blochの発見が大きかったのは、「名詞+だ」も動詞や形容詞と‘parallel’な形を持つことに気が付いたことにある。例えば下の表2のように、後続する形式によって、動詞も形容詞も、「名詞+だ」もそれぞれのformationを持っていて、3つの述語の関係は平行である。

下線部の「じゃ」「だった」「〇」「の」「だ」は、全て「だ」の一つの形であるとBlochは述べた。この発見によって、日本語教育ではある文型を導入する際、常に3つの述語がどのような形をとるかを説明することになった。述語3本立てはJordenや寺村(1982)に確かに引き継がれ、日本語教育においては動詞、形容詞、「名詞+だ」の述語3本立てが定着したのである。

さて、Bloch (1946b)は「だ」の交替形「の」について、一つの大きな宿題を残した。「医者^の伯父」という問題である。

(4-1)

Since *no*, the alternant of the copula, is homonymous with the referent particle *no* ‘of’, some expressions are ambiguous. *Isya no, ozi* means ‘my uncle, who is a doctor’ if *no* is the copula, but ‘the doctor’s uncle’ if *no* is the particle. Since the head of each expression is the noun *ozi* ‘uncle’, there is no way of distinguishing them except by meaning. To analyze a sequence A *no* B (where A and B are nouns), we apply the following semantic test: if the statement A *da* ‘someone or something is A’ provides a description of B, then *no* is the copula; if not, it is the particle.

Bloch (1946b:227)

(拙訳) コピュラの交替形の「の」は、関係助詞の「の」と同音意義なので、表現によっては多義的になるものがある。「医者^のの伯父」という表現は、「の」がコピュラなら‘my uncle, who is a doctor’の意味になり、助詞なら‘the doctor’s uncle’という意味になる。表現の核となるのは名詞「伯父」であるのだから、意味によってしか両者を区別できない。「AのB」(A, Bは名詞)という表現を分析するためには以下の意味的テストを行う。「Aだ」という陳述がBの説明であれば「の」はコピュラであり、そうでなければ助詞である。

表2 動詞、形容詞、「名詞+だ」の‘parallel’な関係

	Negative Past	-tara	-ka mo sirenai	-hazu	-sou da
食べる	食べなかつた	食べたら	食べるかもしれない	食べるはず	食べるそうだ
寒い	寒かつた	寒かつたら	寒いかもしれない	寒いはず	寒いそうだ
雨だ	雨 ^{じゃ} なかつた	雨 ^だ つたら	雨 ^〇 かもしれない	雨 ^の はず	雨 ^だ そうだ

このような説明は、日本語学習者にとって重要なものである。しかし、残念ながらその後の日本語教育において、Jorden (1987a)を除き、こうした問題が取り上げられてきたことはない。

それどころか助詞「の」を廃止しようとする動きさえあった。奥津 (1964b:246) は「格助詞の「の」は、全て「だ」の連体形と考え、格助詞から除くことを主張した。奥津 (1978) は、次のように述べている。

(4-2)

- (4) [オーストラリア人~~デ~~ 都立大学生~~ダ~~]クラーク君 →
[オーストラリア人~~デ~~ 都立大学生~~ノ~~]クラーク君

並列構造ならば「ノ」は「ダ」の連体形だが、単純な

- (5) 都立大学生~~ノ~~クラーク君

の場合なら、「ノ」は「ダ」ではなく連体助詞だというのはおかしい。どちらにしても要するに「都立大学生~~デ~~アルクラーク君」という意味であるし、この「ノ」もやはり「ダ」の連体形とした方がいい。ブロックが指摘した「医者~~ノ~~伯父」も同じことである。

奥津 (1978:142, 下線は原文どおり)

これは Bloch と何も同じではない。Bloch が述べているのは次のような場合である。

- (1) 事件の犯人は、この病院に勤務している
医者~~ノ~~伯父にあたる人物だそうだ。
(2) セカンドオピニオンを医者~~ノ~~伯父に聞いてみよう

(1)の「の」は「だ」ではない。(2)の「の」は「だ」である。「の=だ」である場合と「の≠だ」である場合で意味が異なるというのが Bloch (1946b) の指摘である。したがっ

て助詞「の」を全廃したら、この2文の違いは説明はできなくなってしまうのである。

コピュラの「だ」の活用形と、助詞の境界線が実に曖昧であることはさきにも述べた。松下 (1930) は「で」を断定の動助辞とし、「東京で学問する」のような格助詞の「で」も、全て断定の動助辞「で」で説明できるとして、助詞の「で」を撤廃しようとした。奥津も助詞「の」は全て「だ」の連体の「の」で説明できるとして、助詞「の」を廃止しようとした。逆に、Bloch, Jorden は「病気になる」のような「に」を助詞とし、「だ」の活用形としての「に」を認めなかった。こういうところが「だ」のおもしろいところである。どこまでが「だ」でどこからが助詞なのか。その境界線は見る者によって違う。人を惑わす妖怪「だ」ならではである。

さて、Bloch, Jorden は、全ての「の」が「だ」の連体形とは考えていない。「の=だ」である場合と「の≠だ」である場合の違いを日本語教科書の中で取り上げて説明した。ただそうした丁寧な説明は、その後の日本語教科書には継承されていない。現在、実際に日本語を教える場面では、この「の」を助詞として教えるほうが一般的であろう。例えば次のようにである。

(4-3)

The particle の itself doesn't have any special meaning in this pattern, but it functions as a connector of two nouns. The meaning comes from a semantic relationship between the first noun and the second noun after they have been connected. Some example are shown below. [中略]

5. The first noun indicates the relationship between the speaker and the second noun or explains something about the second noun.

- (例) 1. 先生の中村さん
 2. 友だちの山田さん
 名古屋大学日本語教育研究グループ編
 (1988:67-68)

(拙訳) 助詞「の」はこのパターン (N1のN2) において特別な意味を持たず、二つの名詞を結びつけるものとして機能する。一つ目の名詞と二つ目の名詞が結合された結果、意味的關係が生じる。以下例を挙げよう。〔中略〕

5. 最初の名詞が、話者と二つ目の名詞の關係を示しているか、または二つ目の名詞について説明している。

「だ=の」である場合であっても、とりあえず助詞として教えておくほうが無難だからであろう。藤原(2010)が述べているように記述文法と教育文法と必ずしも一致しない。しかし、だからといってBloch(1946b)の残した宿題を、私たち日本語を教える立場にある者が無視していいということにはならない。

以上、「だ」をめぐる研究史と日本語教育の現状を概観してきた。Bloch(1946b)がゼロ交替形を想定するまで、「だ」は文法諸家によって実に様々に解釈されてきた。そのことを念頭において、次のミラーの言葉を読むとき、Blochの業績の偉大さがよくわかる。やや長くなるが引用する。

(4-4)

ブロックによる現代日本語繫辞の完全なる系列の公式化は、実際問題として、彼の日本語記述の最も独創的部分の一つであり、卓越した考察にまさる功績でもある。大多数の日本の文法家にとって、繫辞は未だに助動詞という大グループの一つに過ぎず、助動詞自体、日本語の形態論的型式内におけるその変則的位置はもとより、統語論におけるその独自の役割をも全く曖昧にしている範疇で

ある。それは更に、日本語文法では、一般に、指定助動詞 (deictic auxiliary verb) なる驚くべき用語のもとに扱われており、これは、文法用語は本来恣意的性格であるという原則を好意的に解釈しても、利点も論理も認め難い混成名称である。日本語文法手引書などに見られる普通の論法は、指定助動詞を、その形態が極めて複雑な系列を示してゐることに全くふれずに扱おうとしているが、これは、英語の'to be'を'am, is, are, was, were'などにふれずに「記述」しようとすることに相当するはなれ業と言えよう。isya no oziのnoとsizuka na tokoro(静かなところ)のnaはいずれも繫辞の異形態とするブロックの考え方は、先ず屈折論文³⁴で示され、エール大学戦時言語課程から生まれて広く用いられた口語日本語入門書³⁵にも組み入れられた。同分析は、また、ブロックの門下生エレノア・ジョーデンの著わしたテキスト³⁶に取り入れられた。これらのテキストによって、それは多くの外国の日本語学徒には常識となっているが、彼らの大多数は言語学の素養もないし興味もなく、ただ便宜上學んだに過ぎない。にもかかわらず、isya no ozi ([my] uncle the doctor)のnoを繫辞の異形態とする分析法は、日本の文法家には全く知られないままになっている。それも、或る時は、この原理は常に彼らの研究の表面下、手をのばせば直ぐにとどくようなところに潜んでいるというのに。故時枝誠記(1900~67)は、おそらく現代文法家のだれにも劣らぬほどその点に近づいた学者と言える。これに関して、奥津敬一郎は、時枝

³⁴ Bloch (1946a) のこと。

³⁵ *Spoken Japanese* のこと。

³⁶ Jorden (1963:350) に 'no and na are special alternants of da which occur only at the end of a sentence which describes a nominal.' (拙訳: 「の」と「な」は「だ」の交替形で、名詞を修飾する文の最後で生じる) という記述があり、'gēnki na kodomo', 'byōōki nā no', 'byōōki no kodomo' という好例を挙げている。

が自力でその点に到達した、と主張しているが、事実はやや異なる。たしかに時枝は、noを繫辞の異形態と自発的に認め、それを繫辞異形態naと同じレベルで分析に組み入れた点では（現在は学校文法でかなり確立されている）、現代日本の文法家の間ではユニークな存在であった。しかし彼は、noがはっきりnaと平行する比較的限られて重要性の少ない（しかも明白な）場合、たとえばdame na toki（駄目な時）と並んでwazuka no o-rei（僅かの御礼）などの場合にだけ行ったのであり、分析を広げてisya no oziのような難問を包括するまでには至らなかった。時枝分析に関する奥津の主張は不当であるが、更に驚くべきは、彼が、ブロックをもって初めとする分析そのものを、門下生ジョーデンの業績に帰していることである。これは、ブロックの日本語研究の詳細が、ヨーロッパ諸語で著わされた言語学文献に関わりをもつ少数の日本の学者にさえ、ほとんど知られないままになっていることを示す一つの著しい例証である。問題の分析に関する伝統的な日本語文法家の総意は、おそらく、その分野の総帥金田一春彦の研究に見られる。彼は、繫辞形態の説明を、uti ga hongoo no hito（家ガ本郷ノ人）のnoという秀例でしめくくっているが、この句について、それは相関助詞〔金田一では「格助詞」一訳者〕noが繫辞の代用をした場合であると述べている。

ロイ・A・ミラー著、小黒昌一訳
(1974:147-148)

ミラーがこう述べた後、ほどなくして、奥

津(1978)の「述語代用説」が大々的に広まっていた。「だ」は述語の代用なのか、述語の省略なのか、その議論は現在でもまだ続いている³⁷。その一方、「だ」のそのほかの機能についてはほとんど取り上げられることはない。例えば、「だ」の「前文代理的な役割」は、今や単に前文を受けて接続詞を作るだけではない。以下は、筆者と小学生の娘の会話である。

A: ねえ、明日って給食ないんじゃないの。

B: なの？

A: じゃ、お弁当ってこと？

B: じゃない？

A: 明日、部活はあるんでしょ？

B: φかも。

A: 試合、出られそうなの？

B: っぽいね。

A: よかったね。頑張らなきゃね。

B: だね。

「だ」は、たった一つの音でありながら、前の人が出たこと全部を引き受けている。そればかりか「な」や「じゃ」、ゼロ交替形も前文を受けることができるようである。こんなに便利な語がほかにあるだろうか。もはや指示詞「そう」が果たしてきた職域を脅かしているようでさえある³⁸。

妖怪「だ」は、まだまだ進化中だかもしれない。

<付記> 本稿は池田(2017)「Bernard Blochの日本語教育への貢献」金城学院大学大学院文学研究科国文学専攻提出博士論文の第7章を加筆訂正したものである。

参考文献

- Aston, W. G. (1871) *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* 2nd ed. 李長波編 (2010)『近代日本語教科書選集』第9巻、クロスカルチャー出版。

³⁷ 例えば野田(2001)など。

³⁸ もっとも「明日部活あるんでしょ」に対して「かも」と答えた場合、「かも」の前に存在する「だ」のゼロ交替形が前文を受けているのか、「かも」の前に省略された「そう」があって、それが前文を受けているのか、どちらであるのかはより多くの例を収集して検証してみる必要があるだろう。

- Bloch, B. (1946a) Studies in Colloquial Japanese: I. Inflection. *Journal of the American Oriental Society* 66, pp.97-109.
- Bloch, B. (1946b) Studies in Colloquial Japanese: II. Syntax. *Language* 22, pp.200-248.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. (1945) *Spoken Japanese Book One*. New York: H. Holt.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. (1946) *Spoken Japanese Book Two*. New York: H. Holt.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. (1972) *Spoken Japanese Book One*. Ithaca, N. Y.: Spoken Language Services, Reprinted in Bloch, B. & Jorden, E. H. (1945) *Spoken Japanese Book One*. New York: H. Holt.
- Chamberlain, B. H. (1889) *A Handbook of Colloquial Japanese*. Second Edition, In Kaiser, S. (ed.) (1994) *The Rediscovery of The Japanese Language Vol.8*, Curzon Press.
- Henderson, H. G. (1943) *Handbook of Japanese Grammar*. Cambridge, Mass.: The Riverside Press.
- Imbrie, W. (1889) *Handbook of English-Japanese Etymology*, 2nd ed., 李長波編 (2010) 『近代日本語教科書選集』第11巻, クロスカルチャー出版.
- Jorden, E. H. with Chaplin, Hamako Ito (1963) *Beginning Japanese Part I*. New Haven and London: Yale University Press.
- Jorden, E. H. with Noda, Mari (1987a) *Japanese: The Spoken Language Part 1*. New Haven and London: Yale University Press.
- Jorden, E. H. with Noda, Mari (1987b) *Japanese: The Spoken Language Part 2*. New Haven and London: Yale University Press.
- 池田葉採子 (2013) 「B. Blochの活用論の成立—影響を与えた先駆者たち—」『金城学院大学論集』人文科学編 第10巻第2号, 金城学院大学, pp.143-152。
- 奥津敬一郎 (1964a) 「「ダ」で終る文のノミナリゼーション—展成文法への試み—」『国語学』第56集, 国語学会, pp.74-86。
- 奥津敬一郎 (1964b) 「「の」のいろいろ」『口語文法講座 3 ゆれている文法』明治書院, pp.238-253。
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノー—』くろしお出版。
- 金田一春彦 (1955) 「日本語 Ⅲ. 文法」『世界言語概説 下巻』研究者辞書部, pp.160-199。
- 佐久間鼎 (1943) 『日本語の言語理論的研究』三省堂。
- 佐久間鼎 (1956) 『現代日本語法の研究』厚生閣。
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』第1巻, くろしお出版。
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』岩波書店。
- 名古屋大学日本語教育研究グループ編 (1988) 『現代日本語コース中級 I』名古屋大学出版会。
- 野田尚史 (2001) 「うなぎ文という幻想—省略と「だ」の新しい研究を目指して—」『国文学 解釈と教材の研究』46号, 学灯社, pp.51-57。
- 橋本進吉 (1948a) 『新文典別記口語篇』富山房。
- 橋本進吉 (1948b) 『國語法研究』橋本進吉博士著作集第二冊, 岩波書店。
- 藤原雅憲 (2010) 「記述文法と教育文法の間—「の」と格闘したBlochに倣いて—」『平成22年度日本語教育学会第1回研究集会予稿集』日本語教育学会, pp.53-56。
- 松下大三郎 (1906) 『漢譯口語階梯』誠之堂書房。(李長波編 (2010) 『近代日本語教科書選集』第7巻, クロスカルチャー出版)。
- 松下大三郎 (1961) 『標準日本口語法』白帝社。(松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』の復刻版)。
- 三尾砂 (1942) 『話言葉の文法 言葉遣篇』帝国教育會出版部。
- 三尾砂 (1948) 『國語法文章論』三省堂出版。
- 山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』關西專賣。
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館。
- ロイ・A・ミラー著, 小黒昌一訳 (1974) 「バーナード・ブロックと日本語研究 (下)」『言語』第23号, 大修館書店, pp.146-155。
- ロイ・A・ミラー著, 林栄一監訳 (1975) 『ブロック日本語論考』研究社。